受難節第２主日礼拝説教「見えるようになる」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年2月25日

## 【旧約聖書日課】列王記下　6章8～17節

8アラムの王がイスラエルと戦っていたときのことである。王は家臣を集めて協
議し、「これこれのところに陣を張ろう」と言った。9しかし、神の人はイスラ
エルの王のもとに人を遣わし、「その場所を通らないように注意せよ。アラム軍
がそこに下って来ている」と言わせた。10イスラエルの王は神の人が知らせたと
ころに人を送った。エリシャが警告したので、王はそこを警戒するようになった。
これは一度や二度のことではなかった。11アラムの王の心はこの事によって荒れ
狂い、家臣たちを呼んで、「我々の中のだれがイスラエルの王と通じているのか、
わたしに告げなさい」と言った。12家臣の一人が答えた。「だれも通じていませ
ん。わが主君、王よ、イスラエルには預言者エリシャがいて、あなたが寝室で話
す言葉までイスラエルの王に知らせているのです。」13アラムの王は言った。「行
って、彼がどこにいるのか、見て来るのだ。わたしは彼を捕らえに人を送る。」
こうして王に、「彼はドタンにいる」という知らせがもたらされた。14王は、軍
馬、戦車、それに大軍をそこに差し向けた。彼らは夜中に到着し、その町を包囲
した。
15神の人の召し使いが朝早く起きて外に出てみると、軍馬や戦車を持った軍隊が
町を包囲していた。従者は言った。「ああ、御主人よ、どうすればいいのですか。」
16するとエリシャは、「恐れてはならない。わたしたちと共にいる者の方が、彼
らと共にいる者より多い」と言って、17主に祈り、「主よ、彼の目を開いて見え
るようにしてください」と願った。主が従者の目を開かれたので、彼は火の馬と
戦車がエリシャを囲んで山に満ちているのを見た。

## 【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙　5章6～14節

6むなしい言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは
不従順な者たちに下るのです。7だから、彼らの仲間に引き入れられないように
しなさい。8あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光とな
っています。光の子として歩みなさい。9――光から、あらゆる善意と正義と真実
とが生じるのです。――10何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。11実を結ばない暗
闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。12彼らがひそかに
行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。13しかし、すべてのも
のは光にさらされて、明らかにされます。14明らかにされるものはみな、光とな
るのです。それで、こう言われています。
「眠りについている者、起きよ。
　死者の中から立ち上がれ。
　そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

**【福音書日課】ヨハネによる福音書　9章1～12節**

1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2弟
子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれ
が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」3イエスはお
答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。
神の業がこの人に現れるためである。4わたしたちは、わたしをお遣わしになっ
た方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない
夜が来る。5わたしは、世にいる間、世の光である。」6こう言ってから、イエス
は地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7そして、「シ
ロアム――『遣わされた者』という意味――の池に行って洗いなさい」と言われた。
そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。8近所の人々
や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをし
ていた人ではないか」と言った。9「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。
似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。
10そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、11
彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに
行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようにな
ったのです。」12人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りませ
ん」と言った。

**シロアムの池【こども説教のために】**

教会は、先々週の水曜日から「受難節（レント）」の期節を歩んでいます。主イエスが荒れ野で四十日の断食をされ、悪魔からの誘惑をお受けになられたことを記念して、わたしたちも誘惑から離れ、神へと心を向けなおすことができるように祈るときです。この祈りの期節を、主イエスが導いてくださいます。そして、わたしたちが見えていなかったものを、主イエスは見えるようにしてくださるのです。

エルサレムの町においでになられていた主イエスは、通りすがりに、生まれつき目の見えない人がいるのを見かけました。弟子たちは、その人の目が見えないのは、その人か両親が罪を犯したからだと考えました。ところが、主イエスは、「そうではない」とおっしゃって、その人に近づくと、ご自分の唾で土をこねてその人の目にお塗りになり、「**シロアムの池に行って洗いなさい**」と言われたのです。その人は、言われたとおりシロアムの池に行って目を洗いました。すると、その人の目が見えるようになった、というのです。

主イエスは、天の御父のもとから遣わされたお方なのです。御父の御業を行われ、わたしたちの目をお開きくださり、わたしたちが御父の御業を見ることができるようにしてくださるのです。

## 神の業がこの人に現れる

「受難節」を迎えた教会が、洗礼志願者と共に歩むことができるのは、幸いなことです。伝統的な教会では、受難節の最初の主日に、「復活祭（イースター）」での洗礼を志願する者たちのための志願式を公に執り行っています。志願者の備えが、教会共同体の交わりの中で導かれ、共に洗礼式に臨めるようにするためです。わたしたちの教会では志願式を行う習慣がありませんが、わたしは、牧師として教会の皆さんに、志願者が与えられていることをお知らせするようにしています。皆さんに憶えて祈っていただきたいからです。そしてまた、ご自身が洗礼を授けられたときのことを思い起こしていただきたいからです。

わたしたちの多くは、すでに洗礼を授けられた者として、日曜日の教会へと集って来ています。自分の意志で礼拝にあずかっている、とも考えているでしょう。誰かに強いられてではなく、周囲に流されてでもありません。もっとも、その自分の意志というものが、必ずしも明確な信念や熱心な宗教心によるものとは限らないかもしれませんが。

洗礼を志願される方は、しばしば、志願を申し出られながら、なお躊躇されていることがあります。ご自身の志願の意志が確かなものなのか、的外れなものなのではないか、まだ早いのではないか、と迷われるのです。中には、牧師に判断をしてもらいたいとおっしゃる方もあります。それでも志願を申し出てくださったのだとすれば、牧師としてその志願をお受けしない理由はどこにもありません。もちろん、志願されたというその一点で十分ですから、牧師が何か試問して、合否を判定するようなこともありません。いいえ、もしかすると、その志願ということさえ、本質的には必要のないことだったかもしれないとさえ、わたしは考えることがあります。

主イエスが土をこねて目にお塗りになり、シロアムの池で目を洗うようにさせられた人は、主イエスに「見えるようになりたい」と願ったわけではありません。主イエスから「見えるようになりたいか」と問われたわけでもありません。それどころか、主イエスを知りもしなかったのです。ただ、通りすがりの主イエスに、彼は見出されました。いいえ、主イエスの弟子に、見出されました。彼の、あるいは彼の両親の、罪を問う弟子たちに。

そのひとりの人に、主イエスは、「神の御業を行う」とおっしゃられたのです。天地創造のときに主なる神が**土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた**（創世記 2:7）ように、主イエスは、ご自分の唾で土をこねて命を吹き込まれ、その人の目とされたのです。彼自身の身に起こった神の御業を見ることのできる目を、開いてくださったのです。

わたしたちも、志願者の身に起こっている神の御業を見ようとしています。

**遣わされた者**

わたしは、いつも思うのです、「洗礼志願者は、神からの教会への贈り物だ」と。もちろん、志願を申し出てくださる前から、そうなのです。初めて教会の扉をくぐり、日曜日の礼拝へと加わってくださったときから、わたしたちは、その人のことを、教会に与えられた贈り物としてお受けしているのです。

贈り物をぞんざいに扱ってはいけません。わたしたちは、しばしば、そのようなことをしてしまうのです。自分が欲しかったものではなかったからと言って、あるいは、贈り主のことを心に留めるほどの者ではないと思って、そうしてしまうのです。けれども、贈り物を受け取りながら放置していたのでは、贈り物に対しても、贈り物を送ってくださった方に対しても、失礼極まりません。

主イエスは、生まれつき目の見えなかった人の目にこねた土を塗られると、「**シロアムの池に行って洗いなさい**」と言われました。ヨハネ福音書は、「シロアム」とは「**遣わされた者」という意味**だと、わざわざ説明しています。それは、主イエスが言われたのは、ただ貯水池の「シロアムの池」のことなのではない、と理解したからでしょう。主イエスは、その人を、「**遣わされた者**」のところに行かせた。そう理解するように、福音書は、わざわざ説明を加えているのでしょう。

主イエスは、その人の目にこねた土を塗られる前に、弟子たちに言われています、「**わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない**」と。主イエスこそ、天の御父から「**遣わされた者**」なのです。主イエスは、こねた土をお塗りになった人を、その「**遣わされた者**」のところへ行かせようとなさったのです。その人、「**遣わされた者**」のもとで洗うならば、その人は見えるようになるからです。神の業が見えるようになるからです。

「受難節」の歩みを進めていくとき、わたしたちは、天の御父のもとから遣わされた者であるお方が、今度は、弟子たちを、またわたしたちをお遣わしくださる、ということへと導かれていくことになるでしょう。弟子たちとの最後の晩、主イエスは祈って言われました、「わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました」（ヨハネ 17:18）。ご復活の祝いを迎えるとき、わたしたちは更に、主イエスの御告げになる言葉を聞くことになるでしょう、「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（ヨハネ 20:21）。

そのときには、わたしたちが「シロアムの池」になるのです。教会が「シロアムの池」になるのです。ここに、主イエスによって新しく造られる人が送られてきます。その人は、ここで、共に神の御業を見る者となるのです。